

## 華織とその家族

京都大学教育学部  
博士課程3回生

橋本 真理子  
藤繩 やよい

### 1. はじめに

最近思春期の子どもたちの問題として増加しているものに登校拒否と非行がある。非行は自我同一性の確立といった思春期の心性と深くかかわって現われる問題でありながら、その反社会的行動のため、我々の相談室に訪れることが多い。1つには内的洞察を主眼とする治療室内でのセラピイが、行動化を特徴とする非行のクライエントの問題を扱いきれない点にあると思われる。故に、非行を扱う際には、從来の治療的枠組を再考し、何らかの治療技法の工夫をしなければならないと思われる。

また、非行への觸わりは、家族への配慮を忘れてはできないだろう。非行に限らず思春期の子どもの問題は家庭内力動の外在化といえる側面がある。「家族神経症」(ラフドルグ)という語は、今は使われないが、単にクライエント個人の神経症的あらわれより、家庭内の神経的な相補的結合に焦点をあてていることで、診断的に神経症とも精神病ともいえない「非行」を適確に表現しうる用語と思われる。治療者は、単に非行の子どもたちだけではなく、家族のもつ神経症的結合に治療的働きかけをおこなってゆくことで、子どもの治療を進めてゆかねばならない。そしてはじめて、子どもばかりでなく家族を一つの有機体として、その自己実現の過程を共にしてゆくことになる。

ここでは、一人の非行少女華織とその家族との出会いを通して、この家族が、華織の非行を要因として歩んだ過程を描いてゆきたい。また華織とその家族の歩んだ過程のなかに、治療者の果した治療的働きかけの意味を参考してみたい。

華織は、来談当時中学1年、上に姉(眞弓・高3)と兄(法和・高2)がいる。父(法夫)は工場を経営しており、母(律子)もそれを手伝っている(名前はすべて仮名である)。

### 2. 来談に至るまでの家族の軌跡

法夫の父は法夫が中学校を出たころ家出しし、法夫はすぐ働きはじめた。仕事に明け暮れ、盆も正月もなかったという。下に4人の弟妹がいる。

律子は四国的小都市に5人姉弟の長女として生れた。高校卒業後、働いて家計を助けていた。その町で結婚式の日取りまで決ったある日、律子は突然家出して関西に出、そこで法夫と切り合って結婚した。結婚後、律子は法夫の母や4人の弟妹と同居することになり、女中代りにいじめられ、こき使われることで毎日が過ぎた。律子は人の目を気にし、いじけて自罰的になって、結婚前までの明るくよく笑う性格は一変した。

そんな中で、法夫は独立して工場を持ち、順調に、2年後には別居、数年後に家を建てて移った。このころ華織は1~2才であった。

なんとか一軒の家に親子5人が落ち着き、律子もやっと一家の主婦としての自分をつかもうとしていた矢先、法夫の浮気が明らかになつた。相手は年若いOLで、法夫は毎晩帰宅が遅かった。2人で家に来て律子をこき使うことさえあつた。そのうち、律子をおい出して、その女と一緒になる結果が2人の間にできていることが発覚した。律子は動転し、2人を呼んで問い合わせると、法夫はこともなげに「その通りや」と言ってのけた。律子はその時から、手足がマヒして動かなくなってしまった。子どものためにと基を飲み、無理して体を動かしていたが、律子の頭には家を出ることしかなかつた。

ある晩、律子は家出を決心し、荷物をまとめて、子どもたちを寝かしつけようとした。真弓と法和はまもなく寝入つたが、華織は何故かいつまでたっても泣きやまず、律子にしがみついて離さなかつた。律子は泣いてる華織を置いて出たが、真夜中すぎ、どうしても華織のことが気になって家に戻つた。華織は声を枯らしてまだ泣き続けていた。

法夫はそのうち女と別れ、酒を飲むたびに「許してくれ」と言うようになった。相手の女性は自殺未遂したことの風の便りに聞いた。

一見円満な家庭に戻つたが、律子の気持ちは決しておさまらず、法夫とも二度としつくりいかなくなつた。おこられても、やさしくされても下心がある気がした。法夫は何かを取り戻そうとするかのように、夕食もそこそこに工場に出て仕事にかかり、夜遅くまで働いた。律子は落ち着けず、おさまらない気持ちを抑えようと、外出

が増え、高価なものを買いまわった。その律子の振舞いは近所の人の口にのぼり、「律子が浮気をしている」というわざになった。法夫は何も言わなかったが、言わないほど律子は法夫の気持ちがつかめず、不安が高まつた。そんな生活が数年つづく。

これらの状況にして、華織は病院に来談したのは小学校1年、6才の時である。華織は幼稚園ごろから家の乱暴が目立ち、さらに性器じり、夜尿などの問題が生じ、来談当时、家に帰らず近所の家から学校に通っていた。小児科等を経て、身体的には異常なしということで相談室に紹介された。他に、夜泣き、偏食、指吸い、爪かみなども報告されている。

来談した華織は、ままごとの家に家具や人形をせっせと運びこみ、砂をはこび、壊れた家の壁をセラピストと共に修理するというプレイをして7回で終了した。

当相談室来談後、律子は法夫に対するわだかまりが幾分解け、一家そろっての外出もできるようになつた。華織は外的適応を得て、家から学校に行くようになつた。しかし、3年生になった頃から華織は学校に行くのを嫌がり出した。クラスで自分の隣の席の子が、担任の男の先生に叱られ、華織はその時から体が震えて授業をうけられなくなつたということである。授業中そっぽを向いて編物をし、授業を全く聴かないので、学校から紹介されて少年センターに行つた。以後、学校に行くかわりにセンターに行き、遊んだり本を読んだりして過ごした。

女の先生に代ればといふことで一時、親せきの家に養女としてひきとられて転校した。が、そこのおばさんは、集金の仕事に夜12時過ぎまで華織を連れて歩いた。翌年再び元の学校に戻り、女の担任になつて通学していたが、今度は家の乱暴や反抗が目立ち、家族は手を焼きつけた。法夫はそんな華織をよくなくぐつた。一度「ナイフを持って来い」と怒鳴った法夫に、華織はナイフを持つて来て、「刺せるものなら刺してみろ」と言った。法夫は黙つて部屋に入つてしまつた。

6年生になった華織は、学校の授業そつちのけで勉強はじめた。もともと成績はよかつたが、華織は、国立大附属中と有名私立中をを目指して独学をはじめたのである。試験はいずれも受かったものの、しかしその間で勉強ではすぐれてしまつた。

華織は公立中学に不本意な進学をしたが、華織の行動は一変し、やがて不良グループと急速に親密になり、5月に入ると連日帰りが遅くなつた。少しでも帰りが遅いと、律子はやつきになつて捜しまわり、学校と少年センターに連絡して、見つけるとなぐつて連れ戻した。

しかし不良グループとはかくれてつきあい出し、家で悪くなつてゆく。ここでは何をしてもらつているんだ

とかくれてタバコを吸い、法夫や律子には見むきもせず「おっさん、おばさん」と呼んでいた。7月、不良グループの一人に電話をし、「さみしい、今から死ぬ」と言つてカミソリで手首を切つた。幸いその男生徒が駆けつけて未遂に終つたが、法夫や律子はますます華織を恐しく感じてしまうだけだった。

それでも華織の成績はよかつた。華織は「勉強では先生に文句いわせへん」という信念を持ち、予習は完璧で、先生のどんな質問にも答えられた。「3K（こわい、かしい、かっこいい）の華織」と異名をとり、学校にファンクラブが生れた。

華織の反抗は、夏休み以降さらにはエスカレートした。2学期に入ってからは全く勉強せず、休みの日にも車にいたことはなかつた。華織の暑りが遅いと、律子はすぐ車にのつて仲間の家を捜しまわり、見つけ出すと悪口雑言の末、「二度とつき合ってくれるな」と泣いて連れ戻す。そんな日がくり返された。法夫は華織をなぐり、真面目一本な法和は、華織を毛嫌いして「汚らわしい、早く死んでくれたらしい」と言って華織の髪の毛をもつて振りまわし、しょう油をかけたり家具にぶつけたりした。それでも華織は無言、無抵抗で、かえつてとりつく島がなかつた。

律子はその間、少年センターの指導員にアドバイスを受けていたが、手に余った指導員は「この娘さんを救つてもらうのはむずかしいが」と祈るように気持ちで相談室を紹介したといふ。華織が中学1年の9月下旬であった。

### 3. 来談以降の華織と家族

初回、華織は来談を拒否し、律子のみが来談した。しかしその後、何故か華織の気が變り、10月から親子そろつての来談となり、面接が開始された。（華織担当セラピスト\*：藤岡、母親担当カウンセラー\*：橋本である）

#### <10月>

ボケットに手を入れ、肩をすばめて椅子に深くすわつた華織は、セラピストの場面設定の間無言で「話したくなればかまわない」と言うとそのまま、時々もの憂げに髪をかきあげるのみで1時間を使つた。最後に「華織ちゃんの心の中つて、そういう簡単なことにばにできないんだね」と言うとはじめてニコッと笑い、「来週も来る？」と聞いており、その日は再び泊めていた。

華織の行動は、友達とのつき合い、タバコ、そして喫茶店で高校生のファングループと張り合ひ、警笛に捕縛されるなど、どんどんエスカレートしていく。法夫は「お前なんか死んでしまえ」と叫び、律子は「少年院に入れてやる」と荷物をまとめる始末だった。

「冬休みは1・2学期の復習をみっちりやる」と華織もかくして泣き起し、力まかせになぐる蹴るの騒動があ

となく語り、次いで、7月の自殺未遂のことを語つてくれた。「…先公に不良仲間とのつきあいを理由なく切られて、ひとりぼっちになつて、さみしくて、かみそりで手首を切つた。ああ、これでやつと家から離れられると思った。なのにおばさんは『何でや、何でや』って言う。これだけやつても分かってもらえないのかと思った。」

そして小さいころのことなどを語る。「小さいころから一人ぼっちだった。幼稚園の時、男の子と遊んでいたら、うちの人皆に“男好き”って言われた。意味は分らなかつたけど、皆で私をバカにしてるることは分つた。先生におこられた時も、他の子の親は自分の子をかばうのに、うちの親だけは先生と一緒になつてしまひた。」セラピストは、「今後家出しても、私が京都に戻つてからにしてはかりかかる。40分もの面接時間の延長が競争、カウンセラーにとって最も苦しい時でもあった。

セラピストは華織に、冬休みは家出しないことを約束の中には甘えたい気持ちがあるのだといふことを約束させ、「もしするなら、私が京都に戻つてからにしてはしい」と帰京する日を伝えると、華織は「ウン、わかつた」と言う。

翌年<1月> セラピストが帰京してすぐのある夜、華織から電話がかかり、「先生の所に泊るから出でてきた」という。セラピストはひとまず道順を教え、カウンセラーに連絡し、何度も電話で打合せをする。家の様子を知るために、カウンセラーから電話すると律子は割と平然としており、突然別居話を切りだす。華織の父親に対する反抗がきっかけのと、暴力団とのつながりができるのがこわいとの理由である。律子は今すぐでも律子の実家に2人で別居したいと訴えるが、法和が泣いて嫌がると言う。カウンセラーは慎重に話し合おうと制し、すぐ迎えに行くと不安がる律子に、華織を信じてほしいと言う。

セラピストの所にやつてきた華織はすぐ家に電話し、律子のことを「ママ」と呼んでいた。ボーグレンンドの話、テレビの話などをし、風邪気味の華織に、セラピストは薬のませ、塗り薬を塗つて寝かせた。翌朝ボーグレンンドのAと会う約束だといふ華織を駅まで送つたが、その夜華織はなかなか家に戻らず、結局夜遅く「先生のアパートの下にいるの、泊めて」という電話がかかる。セラピストはカウンセラーに事情だけ連絡し、迎えにいるとAとその友人B（大学生）が送つておらず、その日は再び泊めることにする。華織はすぐ家に電話し、翌日律子が迎えに来ることにして、他愛もない話題をした。华織は「お前なんか死んでしまえ」と叫び、律子は「少年院に入れてやる」と荷物をまとめる始末だった。

翌日の夜、2日ぶりに家に帰つて既に寝ている華織があ

はタバコの煙をはきながら語る。家でも大っぴらにタバコを吸うようになり、学校では先生をやりこめ、高校生のスケバングループからも「組員の弟の女」と一目置かれるようになつたといふ。律子は華織にも良い面のあることを受け入れなければじめるが、一方ますます悪くなる不良的な面の理解に苦しむ。

エスカレートする華織の要求に律子は「私にできなくて死にたいともらし、面接室でねつしまうこともあった。カウンセラーは何とかもちこたえてほほしいと思ひ、華織の行動について説明しようとする。律子は、「自分の、すゞ言いつけた態度が悪いこと、華織の要求する無理難題の中には甘えたい気持ちがあるのだといふことを約束のなかつた」と言つた。

セラピストは冬休みは家出しないことを約束させた。セラピストは「もしするなら、私が京都に戻つてからにしてはしい」と帰京する日を伝えると、华織は「ウン、わかつた」と言う。

翌年<1月> セラピストが帰京してすぐのある夜、華織から電話がかかり、「先生の所に泊るから出でてきた」という。セラピストはひとまず道順を教え、カウンセラーに連絡し、何度も電話で打合せをする。家の様子を知るために、カウンセラーから電話すると律子は割と平然としており、突然別居話を切りだす。华織の父親に対する反抗がきっかけのと、暴力団とのつながりができるのがこわいとの理由である。律子は今すぐでも律子の実家に2人で別居したいと訴えるが、法和が泣いて嫌がると言う。カウンセラーは慎重に話し合おうと制し、すぐ迎えに行くと不安がる律子に、华織を信じてほしいと言う。

セラピストの所にやつてきた华織はすぐ家に電話し、律子のことを「ママ」と呼んでいた。ボーグレンンドの話、テレビの話などをし、風邪気味の华織に、セラピストは薬のませ、塗り薬を塗つて寝かせた。翌朝ボーグレンンドのAと会う約束だといふ华織を駅まで送つたが、その夜华織はなかなか家に戻らず、結局夜遅く「先生のアパートの下にいるの、泊めて」という電話がかかる。セラピストはカウンセラーに事情だけ連絡し、迎えにいるとAとその友人B（大学生）が送つておらず、その日は再び泊めることにする。华織はすぐ家に電話し、翌日律子が迎えに来ることにして、他愛もない話題をした。华織は「お前なんか死んでしまえ」と叫び、律子は「少年院に入れてやる」と荷物をまとめる始末だった。

翌日の夜、2日ぶりに家に帰つて既に寝ている华織があ

## 華織とその家族

「そんなにいらんのやつたら殺せ」と逃げる華織監視体制が強まった。華織は家の唯一の話相手だった犬の写真を送ってくれと再三律子に電話したが、律子はすぐ忘れてしまった。6月上旬、華織は学校も面白くなく、犬に会いたいと思いつた。律子はやっと寝かせたという。律子からの電話を受けたセラピストは、「父と兄に謝らせるべきです」と言った。

家出事件がおさまった頃、律子は、華織が学校で「私、浮気の子やねん」と言っていたと聞き驚く。華織が余り可愛いので親せきの人がそう言っていたのを本気にしたと言う。律子自身も中2の頃まで拾い子だと思っていたらしいが、それでもよう育てくれたと感謝していたのに、と言う。カウンセラーは、疑いをはらすべきだと主張し、そして様子をみようということになった。律子は姉や小姑にいじめられた時には味方してくれた、と華織を見直し、一体化していることがうかがわれた。又、家の時からカウンセラーと律子の一対の関係がくずれ、セラピストに直接電話して華織の様子をきくということが出来た。

「2、3月> 別居の話はうやむやとなり、華織のみ律子の実家の弟の所に行くことになる。「一家の汚点を背負おわして、ふびんだが」と言いながら、律子は占いでみてもらい、「あの子は外に出た方がいいらしい」と心の整理をつけた。以降、あと一ヶ月でいなくなるという限定期のもとに律子は華織を受け入れ信じられるようになり、落ち着いたとみえ、来所意欲は低下して面接日を忘れるようになる。華織は学校には行かず、試験だけを受け、律子と共に引越準備をした。律子は法夫に内緒で華織の要求する高価な家具をかってやり、「これで良うならんかったら主人に何を言つたらよいか」と華織を除く家族の側についてた。

面接の中で華織は「お母ちゃんはいくらか私のこと分ってくれる。おっさんは、私が似てるから恥が立つみたい…」と少しづつ家族のことも見つめはじめた。

3月末、面接の中斷はあまりに早くやつて来て、華織からの提案で文通が続けられることになる。

「4～6月> カウンセラーは律子一人でも来てくれと言うが来所せず、華織のことを忘れたかに思えた。

4月から新しい中学に入った華織ははじめのうち、目を見はるような変貌ぶりを見せた。毎日夜遅くまで勉強し、運動部に入り、先生にも可愛がられて過剰適応気味だった。しかし5月に入ると疲れも出て、そうではなくとも目立つ華織はすぐボーキフレンドができた。そのころのセラピストへの手紙には、遊びが増え、暴走族のバイクで深夜まで砂浜をとばし廻っている華織の姿が書かれてあった。

先生方も華織を信じきれなくなり、叔父夫婦と学校の

授業中気分が悪くなつては保健室で寝ていた。華織は行き詰って薬を飲み、自殺を試みたが、すぐに発見された。結局C市内にアパートを借り、律子が週に3回ほど、家から車で2～3時間かかるこのC市まで行くことになつた。学校の方は好意的であった。

律子は、華織がC市に行くのは本人のためと思って出したが内心寂しくて、と涙する。しかし華織がおちこみをみせるとついていけず、律子の関心は離れ華織への懸念がどびだす。

## &lt;10月&gt;

そんな10月のはじめ律子は自動車事故をおこした。高速道路での正面衝突で、車は大破したが、律子は幸運で打撲だけでした。その連絡をうけた華織は動転し、母の顔を見るまで青ざめていたといふ。以後、華織はせせと家事をやり、しばらく家に滞在してからC市に戻った。事故後の処理のことなどで忙しく、律子はC市のアパートに行かなくなつた。

10月下旬、はじめて華織の方から来所を求める電話があった。やつてきた華織は、筋道の通つたまとまつた話ができ、よくしゃべるようにになつてゐた。そしてはじめて、あの1月の時の事件を語つてくれた。

その頃つき合つていたAは、前年の10月頃、喫茶店で華織の服を脱がせ、マスターや友人達の前でかなり恥ずかしかつた。それ以後、Aは華織を自分の女きどりで連れ歩き、華織もボス的なAについて行った。

そのAに「壳春する気あるか?」と言われ、冗談に「えで」と言つていたことが、1月のあの日現実になつた。Aの友人という大学生Bに紹介され、ドライブに誘われたあとそのままホテルに行き、華織はじめての性交渉をもつた。「自分が傷ものになつたと思うとみじめだつたけど、あのころ家もおもしろくなかったし、お金も欲しかつたから、されるままになつた」という。そのお金はAに支払われ、華織はうけとつていなかつた。その晩、帰りあぐねた華織はAとBに送られ、再びセラピストの所に泊つたわけである。

しかしそれ以後Aが恐ろしくて学校に行かなかつた。叔父の家に下宿してから再びAに金を送れと催促し、Aがやつと送つた時は叔父が保管してしまつた。しかもAの両親は「うちの子にはお金の不自由はさせることはない。そんなお金を借りるわけがない」と華織がおどし取つたことを主張した。

6月の家出の時、家に戻つた華織ははじめてそのすべてを両親に話した。(律子の言つていた重大な秘密とはこのことだらう。)両親は激怒し、華織がおこるのも、荒ぶるものも当然だといって、一家してAとBの家に怒鳴り沈みながらも律子はセラピストとの面接を求めた。セラピストとカウンセラー、律子と知人(法夫の知人)でもある

しかし“自分の人生はメチャクチャになつたのにBは大學生として生活をしている”と思うと華織の胸はおさまらず、今、大学生Bを相手どつて裁判にかける準備をすすめているという。Bの両親は華織が誘惑したと主張していることである。この裁判には家族全員がはじめて一団となってとりかかっており、弁護士もついて、華織はひっこみがつかなくなつた。律子は面接では、裁判については一済語つていない。

この一連の話をはじめて聴いたセラピストは、華織の痛み傷ついた姿に心痛むが、「もう一度恥をさらすことになるが耐えられるか」とも言つておいた。2～3日後の夜遅く、突然華織から電話があつた。「先生がもう一度恥をさらすことになるって言つたことやつと分つた。今、裁判のための作文してくるんだけど、あの時のこ思い出して、自分がみじめで、つらくつて…。くやしさがこみあげてきて許せない。私もつぱつてたし、あの頃の自分思い出すの嫌や。死にたくなつたけど、お姉ちゃんに『あんた自殺未遂ばかりやつて言われた』」「今も死にたい?」「ウン、作文書くのつらいし」「聴いてるだけでもつらい。でも絶対に死はないつて約束して」「ハイ。明日京大行つていい?」「ウン、待つてよ」「夜遅くごめんなさい」

やつて來た華織はやつれて疲れはてた様子。セラピストは思わず華織の肩を抱いた。「ひとりになつたら淋しくなつて、ひとりぼっちに取り残されたと思つたら死にたくない」と言つた華織に、セラピストは「決して死なたくない。今度その気になつたら、葬飯んだり、手首切つたりする前に必ず電話してほしい」という。翌日すぐ電話。「そんな気になつたら電話していいって言われたし…」と、列車から飛び降りようと思ったが、ともかく電話に届つて來たといふ。華織が今、勝と同棲しており休学したいと言つて出したとのことだと反対、アパートを即刻ひき払えと言い出したところだった。「そりや私、つぱつててこうなつたんやけどね、言うたらそいつ私に育てたってこと、こういう私にならざるをえなかつたってことあるわけでしょ。お父ちゃんもお姉ちゃんも、自分たちがどんなに私を傷つけてるかちつとも分つてないのよね。」セラピストは「とにかく電話してくれよよかった」と言う。

## &lt;11、12月&gt;

華織の同様、体学に対して、家では法夫が大反対、アパートをすぐ引き払えとどなつた。律子の態度は硬化しており、「くさりきついている。おちるところまでおちた」とくり返すばかり。「何をこれ以上がんばるんですか」と沈みながらも律子はセラピストとの面接を求めた。セラピストとカウンセラー、律子と知人(法夫の知人)でもある

## 華織とその家族

る) Eさんの4人で、3時間にもわたる面接がもたらされた。

「あなたの子は悪くない一方。同様なんてことが学校にバレたら世間にあわせる顔がない。今まであの子を信じてやっていたが、もう限界。少年院へ行かす」と言う律子に、一度待つべきだが、それは早々に裏切られてしまった。初登校に私服のプラウスを着、髪を染めたまま出かけた華織を真弓は厳しくせっかんし、と組み合ひのけんかになつた。真弓は「壳女！殺してやる！」と叫び、華織はナイフを手に持つた。真弓にかわって律子がアパートに寝泊りすることになり、律子は、朝家に帰つて工場で仕事をし、夕方華織のアパートに戻つて寝るという忙しい毎日をおくことになった。その後も口論は絶えず、怒った華織が夜中にアパートをとび出し、戻るのが2時、3時ということもあった。その度に律子はセラピストに電話してきて「先生の所に行つていませんか？ どこかで土佐衛門になつているのです？」と言うのだった。律子は今年こそ背水の陣であるという切迫感を持っていた。

法夫は華織の別居に金銭的理由から反対しており、反抗的な華織に耐えきれず鑑別所にやれという父・兄・姉に対し律子は、華織の出費や学校での行状は一切内緒にして華織をかばおうとした。

ところが華織は早々にその中学生でもスケバングループの一員として華織は学校に呼び出されてそれを知り、絶望的になつて、親子心中でもしかねない勢いでセラピストに電話してきた。「どこまでおちるのやら。どこまで苦しみたら気がすむのか。」電話口で1時間程泣き、それでも「耐えられるだけ耐えます」と約束してくれた。その日、華織は朝から激しい胃痛と嘔吐が続き、病院に駆け込んで点滴をうけていた。

2月後半、家に戻った華織は、入試の終った法と毎日のようにボーリングに出かけ、驚くほど仲良くなつた。3月上旬、華織は友達と遊び歩いて遅くなり、そのまま蒸発した。警察にも捜索願が出されたが、2日ほどして勝から「来ている」と連絡があつた。数日勝の家に滞在して戻ったが、また家でひと騒動おこり、セラピストの所に「泊めてほしい」と電話があつた。来る途中で友人に会つてドライブに行つてしまい、セラピストの所にやって来たのは夜10時すぎであった。ハーレム調のズボンに毛皮のジャケットという格好で、アパートの前でも皆ぶりぬいてゆく。

華織が休学することで一件落着すると、律子は電話もかけてこなくなった。そして家出などで困った事態が生んぐると、すぐ直接セラピストの方に電話して直接的に今どうしたらよいかという指示をあおぎ、それでこと済んでしまうということが続いた。

华織は「もうかいきれんところにきた。今二人でのりきらんとどうにもならん」と必死で華織に訴えたらしい。

## &lt;5月&gt;

このころ置賜湯が大分悪化していた法夫は、工場でけがをして、仕事のほとんどを律子にまかせ、さらには心疾の発作をおこした。华織は「お父ちゃんもこのごろだいぶ弱うなってきたし、もう憎しみもないわ」と言いはじめる。

ある日の真夜中、律子からセラピストに電話があり、「まだ帰つて来ない」と言う。声は落ちていてむしろ明るく、華織を信頼はじめていることが感じられた。

华織は真弓(浪人中)と、当相談室にほど近い所にアパートを借り、4月から近くの中学に再度2年生として入ることになった。法夫は浪人して、勝の家の近くの予備校に入り、家を出た。そして华織と律子は、4月以降、

1時間後再び電話があり、「華織から連絡がありました。今日は最後のつもりだから思ひきり発散させてほしい」と言うので4時までとおきました。」と言う。华織は「ウン、心配せんと先に寝て。心配かけてごめんね」と言ったといふ。律子の声は涙でつまっていた。

「私は今まで、あの子のためやと言ひながら本当にその子と一緒にいるのが嫌だったんです。それをあの子は感じていたんだでしょう。こちらの出方ひとつでびっくりする程素直になりました。何に対して反抗していたのか、今やっと分かる気がします。」

以後、夜出歩くことや不良グループとのつき合いは一切しなくなつたが、髪の一部は脱色しており、ブラウスは私服でイヤリング(ピアス)をして学校に行き、補導委員には目をつけられていた。担任はセラピストに会いに来て、とにかく華織を受け入れてやつてゆこうという姿勢を示してくれていた。

华織の遊び相手は病気の犬で、华織はこの犬に薬をのませ、病院に連れてゆき、お風呂に入れてやり一緒に寝る。ひとりでいると华織は周囲がすべて木や石で、誰もいない世界に自分一人取り残される気がするし、そんな悪夢をよく見るという。又、机の上の灰皿や置き物が声を出して笑つたりしそうに見えて怖いといふ。こんな心中を华織はこのところはじめて語つてくれた。

しかし华織は朝なかなか起きられず、起きててもフラフラするといふ。毎朝律子とけんかになり、律子は何度か朝、寝ているセラピストを電話で起こす。セラピストは「わがままだけではないかもしないので、一度内科の検査をうけるように」と言つておく。内科検査の結果、肝臓とホルモンに軽い異常がみられた。それ自体はたいしたことではなかつたが、华織は“自分が病気を持つてること”で著しく不安になり、再び不良グループを家に連れこんではビールを飲んで騒ぐ生活に戻つた。律子が看病する事で母子の交流が回復されればとのセラピストの願いはあつさりとくずされた。再び律子から夜電話が来る。「今も帰つたら部屋の中がすごいんです。近くの人も文句言つてくるし、屋上で下着一つで踊つてるとか…」面接の時、セラピストが「病気だって分つてひとりでいるのがこわくなつたんだね。とにかくみんなを周囲にひきとめておきたい気持ち？」と言うと华織は「そう。もう死ぬんじゃないか、あと何年かの命やないかって思つてしまつて怖くて…」と語つた。

## &lt;6, 7月&gt;

8月末、他の男性達との肉体関係のことを勝にはじめ打ちあけた後、华織は急に不安になり、九州の勝を訪ねる。しかし勝はおこつておらず「お前はワシが嫁さんにもらつてやるからしっかりせい」と言われ、安心して戻つて来た。それ以後华織は勝以外の男性とは全くつき合わなくなつた。

律子は华織が少しつしかりしてきたことを認めるようになる。しかし往復2時間もかかるアパートと家の往復は辛いらしく、华織と法夫の板ばさみになつて苦し

ここまでしめるかこちらとせんと。その上でなんと構えて見てますわ」という律子の声を聽いた思いだった。

7月中旬セラピストが帰国すると「先生いなかつたし、相談する人なくして困つたよ」と早速やつて来る。勝が以前の恋人に2度も中絶させていること、今、その女の人は結婚しているのに勝に言い寄つてくるらしいことを知つて荒れていた。「ライラして勉強が手につかず、何をしていても腹が立つて暴れなくなる。時々朝起きると部屋中が散らかつてしまつたりアザができたか全然覚えていない」と言う。ライラが暮り、中学の不良仲間の一人とつき合いはじめ、肉体関係にまで及ぶ。面接にも2度その彼氏を同伴してやつて來た。

7月末、华織はもう2ヶ月生理が止つていることを打ちあけた。「勝の子だと思うけど、今彼ともやつてゐる。でもこうなつてみると頼れるのは勝だけ。お母さんは言えないし、どうしたらいかからなくて」といつになく真剣な表情であった。セラピリストは「人一人犠牲にするかもしない。だからといって投げやりになるな」と話す。その後電話で勝と打合せ、結局、翌日セラピストが付添つて産婦人科を受診した。診察の結果、今のところ妊娠の気配はないとのことで薬をもらつ。待合室で待つ間、华織は緊張した面もちで「もううつりた。もう勝だけにする。びっくりした面もちで「もううつりた。」を出して笑つたりしそうに見えて怖いといふ。こんな心の中を华織はこのところはじめて語つてくれた。

しかし华織は朝なかなか起きられず、起きててもフラフラするといふ。毎朝律子とけんかになり、律子は何度か朝、寝ているセラピストを電話で起こす。セラピストは「わがままだけではないかもしないので、一度内科の検査をうけるように」と言つておく。内科検査の結果、肝臓とホルモンに軽い異常がみられた。それ自体はたいしたことではなかつたが、华織は“自分が病気を持つてること”で著しく不安になり、再び不良グループを家に連れこんではビールを飲んで騒ぐ生活に戻つた。律子が看病することで母子の交流が回復されればとのセラピストの願いはあつさりとくずされた。再び律子から夜電話が来る。「今も帰つたら部屋の中がすごいんです。近くの人も文句言つてくるし、屋上で下着一つで踊つてるとか…」面接の時、セラピストが「病気だって分つてひとりでいるのがこわくなつたんだね。とにかくみんなを周囲にひきとめておきたい気持ち？」と言うと华織は「そう。もう死ぬんじゃないか、あと何年かの命やないかって思つてしまつて怖くて…」と語つた。

8月末、セラピストの不在で面接は休みとなり、セラピストは旅先から毎週1通の絵はがきを出した。华織の生活は一応おちつき、律子は华織がちゃんととしている限りまだ帰つて来ない」と言う。声は落ちていてむしろ明るく、华織を信頼はじめていることが感じられた。

どもの前でアレやつて、パッと寝たまねしてごまかし  
た。その時、汚ない！って思つて、それからすがる気に  
なれなくなつた。信じられない。まさかうちの親がつて  
気がした。それから廊下を歩く時はわざと大きな足音た  
てたりして…』と語り、母を氣嫌いした。

9月末、華織は自分にじっと目を向けて語るようにな  
った。『私は自分の中味に自信がない。小さいころから  
上ばかり見て背のびして育ってきた。中学位になってハ  
ッと気がついて自分の人生ぶりがえってみたら何もなか  
った。生きてきた自分の足跡がない。子供の時代をやつ  
てない』ということばは重みがあった。またこんなエビ  
ソードも語られた。『親が子どもの前でけんかするのには  
何より嫌だつた。3つの時、親がけんかしてゐるのを見て  
私は台所に行って包丁をもつて来て、自分のおなかにあ  
てて、『けんかやめへんと死ぬよ』と叫んだ。それでや  
つとやめてくれた。』

今まで法夫の面倒をみてくれた真弓が外国へ行き負  
担の増えることと、華織の金づかいの荒いことが苦の種  
であつた。法夫は一からたきあげた人間だけに、子どもた  
るものに法外な金を与えることが許せぬらしく、子どもた  
子などもの小さい時は何もせず今になつて一切の責任をか  
ぶせてくる夫をなじり、「主人がいるとおちつかへん。  
私ら4人は心が通じているのに」と法夫に対する恨みを  
述べた。

又、華織が毎朝貧血をおこし、日々記憶がないことが  
あると言うので食生活をきくと、ほとんどカップラーメ  
ンか近くのラーメン屋で食べるという。セラピストは驚  
いて、ちゃんと食事をとるよう、たんぱく質はどんなも  
のに含まれているか、料理の仕方など教える。華織は面  
接の時料理ブックを持参して作り方を2人で検討し、ラ  
ーメンをやめて自炊をはじめた。

真弓は2年間の予定で外国に留学し、華織は「ひとりっ子になつたし喜られる」と喜ぶ。

9月はじめ、法夫は5月以来患っていた狹心症で倒れ入院した。律子はせいしいたという感じで法夫のあと、工場の仕事を一切ひきうけるようになる。病院通り、工場、華織のアパート通りと律子は猛烈にしくなり、華織のアパートにも夜泊めなくなった。

2学期になり、華織はりきって登校はじめ、律子と華織から依頼されてセラピストが家庭教師を紹介したしかし、学校での音楽コンクールの伴奏に選ばれた華織はどうしても学業でできないといふ立ちは増え、休みは

伝へたは病氣で死に、より、華織は「律子がいる」と律子の事をしなくなり、「律子がいる」とホッとする」と律子の存在を求めるようになつた。華織も律子がないと寂しい。律子は法夫と華織の間を往復する多忙な毎日を送っている。時々余りの忙しさにイライラが爆発するが、華織がおちついてきたことで、精神的にはおちついている印象である。

面接では、セラピストが手製のケーキを持参したり、華織がお菓子を持参したりが多くなる。又、華織の自作について食事のつくり方などをさかんに話す。ある夜、華織は、「今お母ちゃんとけんかして腹立つてんねん。よっと先生の所にいかせて。1時間位気持ちはおちつ

4. 4. 考察 1 — 華織のセラピストの立場から一

朝華織は「うちは家族全体の歯車がペラペラ。お母ちゃんが家庭の大太陽なのに、それがいつも曇ってる。私を生んでくれただから、何とか直してほしいと思って文句いふのに」と言う。そして、「このごろお母ちゃんを汚ない！」って感じで、お風呂も先に入られるとあと入れない。とにかくひど腕だったが、朝になつても連絡はなく、とにかくひどいのじょ」「朝からセラピストに電話があり「今日11月中旬、朝華織からセラピストに電話があり「今日行きたい」と言うが、あいにくその日は忙しく、セラピストはそれを断った。律子と華織の言い争う声が聴えた。その後、律子から電話があり、華織が帰宅しないとのことで、とにかくひど腕だったが、朝になつても連絡はなく、とにかくひどいのじょ」と口に口に出しながら笑う。

律子は涙声で再びセラピストに電話してきた。「華織のかわいがっている犬が昨夜からピクとは動かない。華織は死んでいるのでは…」ととり乱していた。セラピストはとにかくその日は自宅で待機することにして、カウンセラーにも来てもらっていた。星前、チャイムが鳴り、とんで出ると華織が立っていた。華織は目に涙を浮べセラピストも思わず涙ぐんでしまった。華織は前夜ホテルに部屋をとり、明方まで勉強していたという。「そのあたりは繁華街やし、こわいから部屋から一歩も出なくなかった」という華織のことばにセラピストはうれしかった。カウンセラーと3人で昼食をとり、夕方華織は律子と共に帰宅した。律子はこの家出における華織の行動にも信頼をとき、これを契機にして始めてカウンセラーとの毎週定期的な面接に通うようになった。

以後、律子と華織は2人でディスコに行ったりドライブに行ったり楽しく過ごしていたが、華織はなかなか学校に行かなかった。「ディスコに行ったりドライブに行ったり、これだけしてやっているのに」と嘆く律子にセラピストは「とにかく2人で過ごして楽しかったことを大切に」と言う。律子は華織が学校を休みながら連絡が多いことが最大の心配事であり、又病気をして跡継ぎのことを考えるようにになった法夫と、父の跡を継ぐ気がなく受験で苦しんでいる法和との間にたって頭を悩む。法和は勉強がうまくいかず参っており、タバコを吸ったりお酒をのんだり荒れるようになつた。法和を眞面目と信じていた律子は「眞面目で勉強一途だった法和が遊び呆けて学校から追い出される」という夢を何度も見て不安に悩んでいた。

華織とその家族は、法夫の病氣、法和の自立、法夫と法和の対立などで、現在大きな転換期を迎えているようである。

考察 1 華織のセラピストの立場から一  
<アカティング・アウト・セラピー>  
華織がアカティング・アウト（行動化）の連續だったのと同様、治療関係をよく見ればセラピストもまた行動化の連續だったようと思われる。家に泊めたこと、夜の電話、母親との面接、そして人に治療経過を話すこと…この報告も…など…。セラピストの行動化は、仕方がかったとして片づけられてきた傾向があり、その時その時、セラピストは納得したつもりで行なっていても、そのことで派生した問題や影響を一面的にしかうけとつていいなかったのではないか。仕方がないということは使う時、できるかぎり、マイナス面を考慮していただきどうかという厳しさが常につきまとわるべきである。仕方のないことは、いくらでも起つてくる。ただその時に

うだから仕方がない」ではなく「こうだけれど仕方がない」ということ、そこでおちこぼれたものが何なのかと、ということを見極めておかねばならないだろう。

行動化自体が良いか悪いかという原則論では、何もないし何も動かないと思う。このケースでもしセラピストが伴組を決してくすさずに固執したとしたら、それは原則通りであるからといってそれでよいことなのだろうか。伴組をくすぐすほどの迫力をもって華織が追つてきた時、なお伴組に固執するのは、これもまた治療関係の中で處理しきれないという一つの行動化なのではなかろう。

行動化という視点から治療関係を見直してみたい。

セラピストにとって華織の行動化は恐ろしく、避けたいものであることは言うまでもない。それが自己破壊的なものであればなおさらであり、また起こった時のショックも他に比してはるかに大きいものである。しかし、セラピストが行動化を恐れれば恐れほど、そのサインは見落されがちであるという矛盾も存在していたように思われる。すなわち、行動化を恐れるからこそ、起こってほしくないと思っているからこそ、セラピストには行動化が起くるのではないかというセラピスト自身の不安を充分に感知することができます、面接で、たとえ華織がそのようなサインを出していてもそれを意識化することができるなかつたと思われる。華織が妙にしゃいでいる時華織がよい子らしく勉強の話ばかり持ち出す時も、セラピストはどこかで不安を覚えながら、その不安を充分にうけとめることに耐えられず「セラピートとしてはうまく流れてる」などと、言う必要のないセリフを何度も吐いていた。華織がドライブに行つた話や新しいボーライフンドの話をした時も、どこかで行動化をおこしはじめているのではないかと思しながら、それを面接場面で直面することをしなかつたことが思い出される。ただ「セラピストが『うまく流れている』と思いたくなる時こそ、うまくいっていないサインが出ている時」という自分自身の防衛にセラピストが気付いた時、行動化は言語化へとむかつたようと思われる。

華織の行動化をおこしやすくした理由の一つには、セラピストと華織との間に、あまりに早くから陽性感情が流れ、そのためには、二人とも面接場面に陰性感情を明らさまに持つことなくなってしまったことがあると思われる。第1回の面接での無言の1時間で、華織はセラピストに言頼をむけ、翌回には家出の計画をうちあけたりする。又セラピストの方も髪をかきあげるしぐさや、よけた振舞いにさえ好感を感じていた。おそらく、一度でも華織に出会った人はきっと華織を好きになるだろう。そんな魅力をもつ子でもある。きらりと光る純粋

華織とその家族  
華織が非行を通じて訴えつけたものではなかったる  
さやひたむきさは人をひきつけずにはおかない魅力であ  
る。それまでも、そしてまた面接開始後も、華織に惚  
れ、そしてまもなく華織に失望して去っていた人は多く  
いる。その中で、一貫して見続けてゆく役割をとつてゆ  
こうという氣負いもセラピストの中にはいた。換言すれ  
ば、決して華織を嫌いにならないぞと構えていたのかも  
しない。セラピストはすべての面を含めてやはりクライ  
エンツの全存在が好きであると感じるなどを基本と感  
じていたことが、かえって嫌いになりそうな面を見えない  
くさせ、疊んだ治療関係を生んでいたようにも思われる。  
今でも、華織のもうさへの自覚、現実適応の悪さへの洞  
察がセラピストには欠けている。

はじめにクライエントを嫌う感情が生じた時は、セラ  
ピストにとって大いに問題とされ、意識されるが、逆の  
場合、すなわち、好きになる時は多くは黙認され、それが  
が治療を支えるものと思われてしまう。しかし、嫌う感  
情が両刃の刃で、有効でもあることと、好きであること  
もまた両刃であるから、そのマイナス面は前者以上に意  
識されるべきではなかろうか。

華織の方に話を戻そう。華織は何よりも、見捨てられ  
る不安、一人取り残される不安を根底にもつて動いてい  
ると思われる。

2才の時、母親が泣く自分を置き去りにしたことが原  
体験かもしれないが、その後の両親の不和や、律子の  
心の奥底での華織への拒否は、華織を、いつ置き去りに  
されるかる分らない不安にさらしつづけたのだろう。華織  
は両親のいさかいを極端に嫌い、両親がけんかをはじめ  
ると、そのどちらか一方と自分がけんかをはじめること  
でけんかをそらしてしまっていったのがよくあつた。3才の時、  
自分の腹に包丁をあてて両親のけんかを阻止したエピソ  
ードはあるに悲しいが、その後も華織は両親がけんか  
をはじめると家出しても注意をむけてしまおう  
としたりした。

「お母ちゃん私の中に2回中絶してん。私がおなかに  
できただとき、これは何せんでも流産するやろ思うて手  
術せえへんかってんて。けど私が生れん」と語る華織  
は青ざめている。自分は家には必要のない人間だったの  
だらうか、生れる前から見捨てられていたのではない  
だらうかといふ。面接初期のころの家出は、たいてい両  
親のけんか中にとびだすというものであった。

見捨てられないために華織がとった手段が「見捨てて  
見捨てられない」ために华織がとった手段が「見捨てて  
見捨てられない」ことだつたのです。つまり、見捨て  
られるが「放ってはおけない」と感じつづけてくれること  
はおけない行動」をとることだつたのです。どちらか  
親が「放ってはおけない」と感じつづけてくれること

悪くなる。いったいどこまでおちるのか」と言ったことは、律子の見方が漠然ではなく、おそらく事実その通りであったからではなく、おそらく事実その通りであったからではない。セラピストは見捨てなくても親はそこまでゆとりが持つてない。華織の変化についてゆけなくなると、律子はセラピストへ直接電話をかけて来る。律子について言えば、見捨ててしまいそうな不安がどんどん高まつたといえるかもしない。セラピストは当然自分と同じ、すなわちどこまでも見捨てない路線にひっぱりこむため、直接的アドバイスを自分の担当でない律子に与えるという行動化を起こす。律子の不安が高まるとそれこそ華織に何をするかならないという怖れから、セラピストは、安易に律子の不安を一時的にせよ取り除くようなアプローチをする。セラピストのこの行動化によって、面接でのカウンセラートと律子の関係は著しく乱され、それが結局律子自身の変化を運らせることになったであろうし、そのことが華織の基本的な不安感を温存し、行動化をひきおこすという循環があったことも推察できる。又、セラピストと律子のつながりが華織にとって、自分とセラピストとの関係をこわすほどのものではないにしてもらスッキリしないものにしてしまっていたと考へることは容易である。

この事例において、華織の行動化、そしてセラピストの行動化は無用のものであり避けるべきであったとか、この行動化は無用のものであり避けるべきであったとか、この行動化は決して思っていない。あるいはその中のいくつかは避け得たかもしれないが、華織は行動化の中で体験し、その体験を言語化してはじめて自分をつかみはじめめる。はじめに行動のある子であり、徐々に行動に感情が伴ってきて、そしてやっとここばにするという段階は一気にとびこえることはできないと思う。

華織は確かにセラピストの行動の中に、見捨てない人を感じていたようと思われる。しかし、見捨てられる不安をもつている華織が見捨てない人を得ることは、必ずしも良いばかりは言えない。なぜなら、見捨てられる不安があるからこそ華織は、親が見捨てる一歩手前でふみとどまっていたのである。そこで、セラピストの登場によって見捨てられる不安が徐々にゆるんでくると、親が見捨てかねない行為にまで華織を入らせることが生じてきてしまうのである。このことはまた、セラピストの行動化という1本の糸を染め出してみたいと思ったのである。華織はセラピストの不在中、不思議と大きな行動化は起こさない。しかしながら見捨てられたかを思つた時、仕方なかつたといふだけではダメのワニペースや虎皮模様のスカートで水滴壳の女の面東にも「子どもが来ると言うかどうか」としぶつた。律子は自分の家族は眞面目一途で華織の行動にはとても耐えられないと言うが、律子の着ている服は黒エナメルのワニペースや虎皮模様のスカートで水滴壳の女の面東があり、眞面目一途とはとても思われなかつた。不良っぽく歩く魅惑的な華織とカサカサと乾燥した感じの律子は対照的で魅了とは思われなかつた。

筆者はこういった印象とは別に、家族の華織への反応に神経症的防衛のようなのを感じ、華織を家族の中にうまくうけ入れていくことが課題と思い、律子に「不真面目な点も認めめてやって」、華織の「10年間の恨みやど面が悪いか考えてみ」といったつきつけに対するは「考えてみるとときでしゃうね」と言っていた。「くさりきつて」、「あんな子知らん」と乱発する面接の中で「おなか大きくなつて帰ってきたらどうしよう」という不安や華織のこと心配して走り回る姿に表現はへタだが母親だから…。

セラピストは、行動化しやすいクライエントには行動化でのりこんでゆき、渦の中に自ら入りこむクセがある。その陰で、サイコセラピストとしてのしんどさは、カウンセラートに一手に背負つてもらっていたようだ。

## 5. 考察2—律子のカウンセラーの立場から

(1) この母親、そして家族に抱いている感じを、適當心理学の用語でうまく言い表わすこととはできない。ど

ういう問題構造がありどんな経過を経てこの家族がどう変わり、どういうしことをしたか、ということを面接プロセスの中から明らかにできたとしても、なお尽くせないとこころがあるようだ。ちぐはぐな感じというのを一番あたっているのかもしれない。鬼ごっこをしていて鬼をつかまえたと思ったら鬼の影だけで、また気をとり直してつかまえるが今度も影だったというイメージがこの事例にはある。そこで上手に考察することをあきらめ、プロセスの推移において筆者の感じたことを一つづつ言葉にのせていくという作業をおこなっていくことにした。その作業をおこなってこの母親理解の助けとなると思ったからである。

(2) 面接プロセス  
プロセスをカウンセラーと母親との関係の変遷にしたがつてわけ述べてゆく。

第一期（1年10月から2年目3月まで、不定期ながら面接に來ていた時期）  
律子は始めから謎の多い人だった。今すぐにでも何とかしてほしいと血相がえてやってきたのに華織の幼少時の生活史や、7年前当相談室に来室したことには触れず（あとでカードの整理をして偶然わかつた）、次回の面接の終束にも「子どもが来ると言うかどうか」としぶつた。律子は自分の家族は眞面目一途で華織の行動にはとても耐えられないと言うが、律子の着ている服は黒エナメルのワニペースや虎皮模様のスカートで水滴壳の女の面東でも思われなかつた。

れられるようになつた。「今まで雇つてかかつたのが悪

かった」とけんていする。しかし次回となると再び「くさり切つてゐる」のくり返し。律子の話をきいてると徐々に華織のよい面をドロの中から砂金をみつけるようにならぬが、すぐ「くさりきつてゐる」という言葉がでてきて今までのつみあげが無に歸してしまつという不毛感を味わわれる。律子の心の層のうちは何か暗くさりきつてゐるといふ言葉が發せられるよう思つた。カウンセラーは、何かよいことを言つてくれるまで時間の枠を破るという儀性を犯しても帰つてほしくないといふ一心でいきていると底の方からいへる。あるようにして「ここで何とかしないと」「本当に甘えたいのね」という言葉がでてくる。律子の心には幾重も層があつてそのかなりの深い層には浮上する力がひそんでおりその力は信頼できるよう思つた。

翌年始めの華織のセラピストへの家出はやっぱりやつてしまつた。母子二人が急速に一体化しているのも不思議な感じがしたし、底に夫婦の不和があることを感じたが、余りにも突然行動の形ででてきたので驚いた。急な行動化は危険と思って「別居の話は慎重」と言つたが、「暴力剣とのつながりが恐い、とり返しのつかないことになる」と訴える律子の現実不安も真実な気がしづ張した。現実不安と別居話が短絡的に結びつくのは不思議だが、律子の不安が眞実であったことについて、セラピスト宅へすぐ迎えにくくといふいう律子を制し「ワントンボおいて華織をみてほしい」と華織の気持の方を重んじたカウンセラーの安易さに心痛む。もちろん迎えにいつたからといって問題が解決したとは思はないが、律子の訴えは子を守る母親の直観だったようと思われる。この家の出を契機として律子はセラピストのところに直接電話して華織の様子をきくといふことがでてきた。この問題は尾をひき、あとで触れることがある。

そのあとで電話で律子は重要なことを語る。華織が浮気の子と信じていたことである。律子もまた中2まで拾い子だと思っていたことである。二人は似ている。カウンセラーは浮気の子ときいてさほど意外でなかつた。その感じさせるものが律子の中にある。だのにまじめ一途というのがちぐはぐなのだ。

カウンセラーは、別居話に夫婦の不和が背景にあるのでは、夫への不満がきけいなかつたのではと思って面接に臨むが、それをすかすかように律子は面接も休みがちとなり再び現れたときは「あの子は外に出した方がよい」と占いでみてもらつて心を固くきめていた。あと一ヶ月でいなくなるとの限定期のうちに律子は華織をうけ入

であつたようだ。

だから10月に律子が交通事故をおこしたときは驚いた。キツネに化されたようだ。車がわからなかつた。庄倒する力の前で自分の存在を無力に感じ、正直言つてお手あげという感じだつた。車が大破する大事故だったのに律子がカスリ傷ですんだといふことが律子にひそむ浮上する力を表しているようで生命力の強さを思い氣をとり直した。

次にやつてきたのは、華織の同居、休学という新たな難題に対し父も母も耐えきれず華織を鑑別所にやララうとしたことだつた。今までの面接でも、華織が難題をつきつけ律子がやつと桿を抜けうけ入れるようになると華織が又新た難題をつきつける。律子はそこですぐ切れどいう気持がでてくるが、治療者がきらいでほしいとがんばるパターンがくり返されたようだ。11月、律子、Eさん、セラピスト、カウンセラーとの4人の面接は、律子の交通事故、華織の壳春、同棲ということが重なつただけに危機感をはらみだづめをむかえた感じがした。三時間に及ぶ面接を経て、律子の中から「何とかがんばつてみます」という浮上する力がどこでもできて、救われたと思つた。

以降、律子は何か事件がおこらぬ限り来室しなくなつたし、華織、セラピストのつながりにまだのぞみを抱き、治療陣との接触が失なれないことを願つた。そして2ヶ月の空白をおき、華織の家出のあとと華織に伴つて律子はやってきた。そのときの律子はやつれきて、毛皮のコートに身をつつみ香水パンパンの以前の面影はなかつた。律子は「家の恥になること」と誰にも言つててくれるな、と言って華織がみんなうちあけてくれたが、誰にも言わずにいるとしんどくて……」と沈みこんだ。

重大な秘密をうちあられ苦しんでいるのがわかつたが、それが決して华織をうちあらぬ感じだつた。この一年は2回しか面接もさじをなげた感じだつた。この一年は自然発生ななかつたが、次々と行動化と思える事件がおこりそのままに不安だけに不安だつた。律子から得る情報は表面的だつたし、父、兄、姉の動きはつかめず、おこつた事実のすじを追えるのは華織セラピストの情報からだけであり、その情報もカウンセラーの律子にもつ感触だけは落差があつてどうしようもない感じだつた。

第三期（3年目4月から10月まで、面接再開、不定期的面接とカウンセラーからの電話の半々）。

— 66 —

「なんば親でもできんことはできん」と華織に説教し「なんば親でもできんことはできん」と言い切つた。

また面接話題の土俵のうえに始めて父親が登場し、家族のうち三人の動きがわからようになり、前のようなどうしようもない感じはなくなつた。華織がよくなるのならという条件でアパートの家賃しかださない夫と、金使いが荒く皆の期待をよそに遊び廻る華織との間に告じむ律子は始めて夫との対立を正面で語るようになる。しかしすぐ法夫は病氣に倒れ、律子と法夫は陰湿な人間をくり返すようになつた。

同じく6月ごろ、律子が7年前来室したときの面接記録がでてきて、法夫の浮氣を始め「家族の軌跡」で述べたこの家族の生活史の全貌が明らかとなつた。その記録をよんではなるほどと思ったが、がっくりきました。つまり華織の行動や家族の病理を生んだ正体がそこにあると思われるのに、それが面接という舞台の上に完全上らない。カウンセラーとの面接の話題は、現実の親子げんか、夫婦げんかでいくのである。また華織のセラピストから律子がある新興宗教団体に入信していくことも知り（律子は全く語っていない）、カウンセラーは自分の面接とのギャップを感じて悩んでしまつた。

華織の行動や家族の病理をうかがわせるものと言えば舞台裏でおくることカウンセラーのこの事例にもつちぐはやな感じだけなのである。それをどう考えたらよいのか困つてしまつた。

律子との面接は電話と半々で続いていたが9月になつても非常事態となると必ずセラピストのところに電話して指示をおぐことが続いた。前から律子がセラピストのところに直接電話してことすんでもういうことは気になつてないし、どうしてだらうと思っていた。カウンセラーの面接が不十分なのだろうか。頼りないのである。律子の電話が去年1月の家出のときから自然発生的に生じたものであり（律子は華織がセラピスト宅へ家出したときよりセラピストに絶大な信頼感を置いていた）、第二期はカウンセラーはこの事例がしんじくある。というよりカウンセラーはこの事例がじんじくある。律子は自然発生したことから自然発生的で荷物を負わせたといふ身勝手で申し訳ない気持ちもあった。というよりカウンセラーはこの事例がじんじくある。律子は切らうとする律子の方方がさじをなげることを要して華織をうけ入れることを求める。それのが母親としての成長につながるのだ。律子はそれが早くで逃げようとする。カウンセラーとして律子の目をそらさないようにすれば、律子、華織の方から律子にしごとをつきつけている。それが母親としての成長につながる。わかつたし、カウンセラーも根性がすわってきたのか前ほど律子の不毛さに悩まされなくなつた（悩まされなくなつたというだけで依然感ずることは感ずる）。律子も、華織が少しよくなってきた事実を土台にふみこえたるところに話せるまで待たれることになる。今考えると、この家族の中でセラピストと関係をもち言語化する力をもつた華織の口から知られたことは、自然の推移

— 67 —

華織とその家族  
律子の耐えられないような行動化はなくなつた)。無責任のようだがカウンセラーの力では律子が逃げないよくなぎとめておくしか能がない。そんなことを考えていたと思う。

セラピストにはかり電話する律子に腹がたち、基本姿勢を正そうと思ったこともある。セラピストにばかり電話する律子に向かって華織の動いている文脈が手にとるようにならぬまま電話をかけるのは不毛の努力のようで本当にしんどく心が重かった。ケースのため、とお題目のように唱えていたのが思ひだされる。律子がセラピストに求めているのは、ここでどうしたらよいかという具体的な助言であり、トレランスがなく行動化しがちな律子に平穡を与える役をしている。母親も毎週が子どものセラピストに子どもについて助言を求めるのも当然であり、カウンセラーは子どもを直接あつての訊でないので聴得方に次ぐのだろう。ときには「セラピストがもっとへたに応えてくれたらよいのに」と思ったこともある。また、セラピストが子どもを自宅に泊めることが多いから、治療陣の他端は隠れないといけない、難しいケースなのだから治療陣が心的に重層になっている必要があるのでは、とも考えて姿勢を正すことはやめにした。

しかしどうしてもちぐはぐとなるのである。セラピストとカウンセラーが入り乱れて律子に接触する、例えば律子がセラピストに電話でたずねた質問をカウンセラーから応えたときは何ともいえずちぐはぐで、今まで何のために面接してきたのかわからなくなり、子どももセラピストのペースに余りにまきこまれていたのではないかと思うようになった。華織のために夫に内緒で金を融通し、漫る間もなく華織と法夫の間を往復する律子にイライラがでて華織にきつい言葉がでると華織は荒れて家出をする。自分のどこが悪いのかとオロオロする律子に向かい悪い点を指摘する華織に、「母親も人間や、母親の立場もわかつてほしい。母親に要求することばかりする立場に変なことしてもらとうと困るので」との応えには、律子にいたげられた恨み、おどろおどろしい情念や犯した罪を秘かにしまいこみ、他者と深くかかわり秘密をみられるることを恐れている。

華織も多難な問題を抱えているが、それに加え、中年の夫婦の危機、兄の自立、二重生活の統合、更年期に際して律子のなさねばならぬしぐどとはこれから多難と思われる。油断しないで気長に会い続けていくうとつてのみを語つて居る。

この論文は表題にもあるように、セラピストのかわりを中心とした、子供の動きを軸にしてまとめていきますね。セラピストのまとめとカウンセラーのまとめは量からして相当地違うようです。アクトティング・アウトということであれば、子供のそれもすごいが、母親のそれも決して勝るとも劣らない。それなのに何故、子供中身のところを隠すことがあります。さきほど「——入江が一番ぴったりする(馬場1976)。鬼女は間に過去のしいたげられた恨み、おどろおどろしい情念や犯した罪を秘かにしまいこみ、他者と深くかかわり秘密をみられるることを恐れている。

(3) 筆者はこの母親についてやはり黒塚の鬼女のイメージが一番ぴったりする(馬場1976)。鬼女は間に過去のしいたげられた恨み、おどろおどろしい情念や犯した罪を秘かにしまいこみ、他者と深くかかわり秘密をみられるることを恐れている。

律子も、夫に裏切られた恨み、除外された怒りを自分の中にじこめ、自分にも隠すことによって耐えたのでないだろうか。この記録はセラピストがシテの役をとり、カウンセラーはワキの役をとったようですね。この性をためこますもつと建設的に話しあうべきだったと思

よりずっと深いかも知れない。おし殺された恨みは、律子の中で光をあてられないまま繁殖して律子の女性性、母性をくいくじしていったという感じがするのを否めない。舞台感情的もつれにばかり氣を奪われて、肝心の律子の姿がみえなくなつたといふことに思う。律子は干からびてカサカサになつたが、華織を鏡とすることにより自分のくいくじしてきたものに光をあて始めたのではないか。华織の女性性の開花とともに律子の水商売的な印象は消え、普通の奥さんのようになってきたこと、子どもをとりこみ切つてしまつという太母的動きから少しすつであるが健康な母親らしさをもつきたことなど。

しかし律子の闇の中に何があるか深く詮索してはいけないのである。秘密を知ろうとする女は羞恥のためかわわってしまうのだから。ひょっとしてみてしまった

### 橋本、藤繩論文へのコメント

廣島大学 鎌 幹 八 郎

カウンセラーの方が耐えきれずぶがれるかも知れない。そういういたた鬼気迫る鬼女と同時に、筆者は律子にやはり普通のお母さんという感じがするのを否めない。舞台の上では深くかかわらない普通のお母さんとして面接していくのがいいのではないか。ただこの家族をしていくのがいいのではないだろうか。この家族の秘密の存在が深く動している見えない力に、この家族の秘密が明らかにかかわっていて、家族の行動の中にその秘密が明らかになつたとしてもそこはそつとしておくのが必要でないかと思う。

文 勉  
馬場あき子 1976 鬼の研究 角川文庫

カウンセラーの方が耐えきれずぶがれるかも知れない。そういういたた鬼気迫る鬼女と同時に、筆者は律子にやはり普通のお母さんといふ感じがするのを否めない。舞台の上では深くかかわらない普通のお母さんとして面接していくのがいいのではないだろうか。华織の女性性の開花とともに律子の水商売的な印象は消え、普通の奥さんのようになってきたこと、子どもをとりこみ切つてしまつという太母的動きから少しすつであるが健康な母親らしさをもつきたことなど。

カウンセラーの方が耐えきれずぶがれるかも知れない。しかし、この事例を特徴づけるものとなつていることと自体がこの事例を特徴づけるものとなつていることです。しかもこのセラピストの動きは、この全体の動きの中で、クライエント、母親、カウンセラーを食つて、一人でスターとしてのびやかに振舞っています。これがたいへん印象に残りました。何となく私としては、セラピストがクライエントを「食っている」ということが気がになりました。どうしてかなあーと考えてみたのが次のようになります。

この事例はまだ継続中であり、これからプロセスとしても予断を許さず、これからもアクトティング・アウトの可能性がないでもないでの、そのことを一心頭に入れるながら書いてみたいと思います。

治療者の記録の最後のところに「セラピストは行動化しやすいクライエントには行動化で乗り込んでゆき、渾沌の中に自ら入り込むクセがある(海点利用者)。そのおかげでわかつたとしてセラピストとしてのしんどさは、カウンセラーに一手に背負つてもらっていたようだと思ふ」と書かれている。私はこれを読んでしまいました。お世辞でよいと思いました。けれども、こんなことを書かれて、いろいろなセラピストの重荷を背負わされたカウンセラーはたいへんだったろうな。これからもたいへんんだろうな。セラピストのことばが、わがままな人種の通交手形のようになついています。さきほど「——入江が一番むきのクセがある……」と治療者は洞察いためた微妙なことばをのべておられるので、わざわざ私の方で傍点をし



とりから来る感覚的な過重負担は一面で華織を鍛え、喧嘩に強い硬質の姿勢を作り、行動化を習慣化させると共に、衝動の柔軟な統制力と感情の統合を備えるべき人格発達を障害させていく。思春期を迎えた華織がこの時期特有の心性の中で、過去から累積されている問題をどうそり再させながら派手な行動化に出るのはむしろ当然な成行きともみられる。想や境遇全体に報復的に、「不良同一性を選びながら成績面で気配を見せる華織は、よたりながらもしゃっきり小気味の良いスターを演じていく。Thは華織への陽性感情を述べているが、この負の要素のある偶像が魅力的であることの一般的な意味およびTh個人にとっての意味は哗然されるに備する気がする。

ただこの華織のビューティフルなイメージも、異性経験や伝授、体学、シンナー吸いなどを経過する中で、だんだん硬質の整いを崩し、男子的でさえあつた氣張りをなくしていく。このことには、全体として混乱している同一性探索の旅の中で急激に起った女性への傾向に由来する面、外罰的な戦いから相手なき戦い(相手が弱つたりいつの間にか敵でなくなったりすること)への変化、行動化がもたらす現実の痛いはね返りなどいろいろのことが関係していると思われる。また華織は「これでやつと家から離れられる」といった言葉を吐くが、家=コンプレクス、は苦しいながらも彼女の存在の重ishでもあり、そこから簡単に離れること、あるいはコンプレクスそのものの衰弱には、彼女の人格の死生がかかわってくると思われる。この意味で華織は「自己」の激動と拡散の危険の中で暗中模索しているのである。

このあたりで治療関係に注目していくと、まず思うことは、関係を築き持続することが難しいこの種の事例の三年にわたる実績の貴重さであるが、チェックポイントをいくつか挙げるとすると、まず「アクティングアウト・セラピー」と称されていることの問題がある。

Thは自分のかわり方の主特徴を行動化と総称した上で、それを自己批判しました評価もしているようで、実際に当事者が治療をふりかえる時の気持としてそれはよくわかるが、行動化をまず本来意味されている内容に即して限定的にとらえてみると、無意識葛藤のミソトメントと思われるものから、無意識葛藤の短絡的・防衛的な行動表現と思われるものまでを皆行動化と大ぐさりするのあまり生産的でないと思われる。逆転移の自己觀察は容易でないが、陽性感情の質的な中味やその消長、展開の丹念な吟味は実質的な有用だと思われる。こういった事例で起つくるThの中のいくつかの「敗かれ」体験の検討もその一つであろう。華織のように行動や身体言語のレベルでばらばらとメッセージを送つてくる相手の場合、そこで非言語的に示さ

れる無意識材料の読み解力が要求されるのだろうが、Th自身も一部触れるように、Th側の内部経験の検討もその意味を汲みとる回路になってくる。

次に治療と華織の行動化の激化との関係であるが、これは必ずしもすつきり整理できない気がする。例えばグリネイカーカーらが指摘するように、丁度親が子供の行動化の引き金を引く如く治療者が患者を行動化の媒体に選ぶことがあるといった治療者自身に内在する行動化傾向の問題、或いは充足さるべき衝動や自己愛・万能感・ヒロイズムといった点でのクライエントと治療者との重なりの問題はどうであろうか。その他の点としては、Thといいう理解者、一種の味方をバックに得ることで、華織にすれば自分の動き(親達への acting out against)が何か正当化され、責任や罪障感を Thに担い分かつてもらって集になる面が、無意識的にしろあつたかも知れないことが考えられる。この点と関連して Thは、自分が見捨てないステーションを提供したことで、見捨てられる不安に由来する抑制力が減退したと述べるが、こうしたことよりは、Thが華織に抑制力が本当に安定点を得たといつたかも知れないこと、そしてこの道具性が治療経過の中で持つ意味がどのようによらえられ自覚されたかの問題がありうるだろう。バックを得ること(そう言えば彼女は外でも同時に強いバックを得ていた)によって、華織の場合基調は ego-alien であると思われる行動化が、一部 ego-syntonic な性質を帶びて膨張したかも知れないことが考えられる。更には、治療関係によって生じる自分の問題への方がしづかのイムパクトが、意識化されにくいけだけ、すでに学習されている行動化パターンにまわること、また、殊に Th に攻撃性が向けられることが殆んどなかったようだが、面接の中にあまり攻撃性が持ち込まれなかつたことの問題もあるかも知れない。

ただ先にも述べた通り華織の行動化そのものが、前半の非行感覚性を帯びたものから後半の相当神経症的な葛藤を中心とした質的に変化して行つおり、殊に母親が彼女にぐんと接近した時残酷なまでに反復されるものは、母親との苦しい関係を恰かも行動レベルで知らず知らず work through しようとしてでもいるかのようであり、彼女自身も自家中毒的な苦しみを見せ。現実感覚の障害や空虚感にもやはりこの人格の死生的な変化に運び込まれる面があるのではないかと思われる。

次に著者達の具体的な治療戦略に触れると、まず Th の華織を守ろうとする気丈な姿勢が全体を貫いて、結局母娘らをも組み入れた華織護謹陣が張られていき、Th が求心点になって、どこかへ何時でも飛んでいきそうな人達をつなぎとめている印象がある。本来の意味の治療

ろんな行動化がやり放しにならなければどうだったのだろうか。たとえば華織が約束の期間行動化を控えたことをめぐって、行動化している時とは違う華織の体験のあり方などを話し合うのもおもしろい気がする。それについても、外の出来事に立ち向つていく努力として内側の仕事に向かう根気(と、この事例では一つの治療的勇気)、短期的な目標と長期的な目標の設定、こうしたものを両立させていく治療者の仕事の難しさをあらためて思わないではない。

いろんな曲折の上、今華織は母親と特定の異性を一応確保することになり、二つの居を行き来しながら学校生活に苦労しており、母親も同様に二軒を往き来しながら事实上の家長として多忙な生活を送っている。これはこの母親にとっての願望実現感<sup>1)</sup>は現段階での自己実現である。まだ一方、弱い病人となつた父親、家をそれぞれ出した兄弟と、この家族は散らばつてこれまでの濃い絆よりも解き薄める形をとっているが、こうした個体距離は各人それぞれにどのような意味を持つていくだろうか。母親のこの動きも彼女自身の洞察による内発的なものかどうかには問題があり、母子関係の本当の整理もこれからだと思われるが、Co を悩ませ続けた彼女も、華織が定期的に通いはじめ自己を語り出しているのと同様形をとり始めている。こうした二人の仕事の中で、華織も被害や加害の地平を抜け出た本当の「自己」を、彼女自身の成長動機を、生み育ていかねばならないのだとうが、まだ染めを残す彼女の髪が語るように、それは徐々にあせらず進むべきはない仕事のようである。

ともあれ、ここまで書きつけられた著者達の健闘を心よりねぎらうとともに、まだまだこれからの方気持で、また経過を生かしながら、治療関係を地道に展開して生まれますよう期待します。